

これは別の漁師のお話です。ある漁師がいて毎日海に漁に出ては少し売って、妻にも持ち帰っていました。さて、この日、彼は海にいましたが、釣りたくても魚は釣れませんでした。魚は釣れませんでした。間もなく釣り針を落とすと重く感じました。引っ張ってみると大変大きい魚が釣れました。彼の舟にも入りません。彼は驚きどうしていいかわかりません。すると魚が言いました。彼は漁師に言いました。「漁師さん、今日は私を放してください。私はあなたに困ったことがあればなんでも助けます。でも今は私を放して行かせてください。」「私はせめて魚を売って食べるものを買いたいのだ。」魚は彼に言いました。「あなたの舟の中に食べ物を置きます。今日は放してください。行かせてください。」漁師は魚を逃がしました。家に戻ると彼は妻に言いました。「この食べ物をみてごらん。私は今日魚を釣ったところ魚が話すのだ。その魚は私に何か問題があればここに来なさい。私を呼びなさいと。私を呼んだら私はあなたを助けにくると。そう彼は言ってこの食べ物を置いていったんだ。彼は自分を放して行かせてほしいといったんだ。殺したり売りに行ったりしないでといったんだ。本物の魚ではないのだろう。彼は話をするんだ。かれは私たちにこの食べ物を残したんだ。」「その魚がそういうのならここに家を建ててと言ったらどうなんだい。この食べ物が私たちに十分だということかい。夫よ、海に戻って魚に家を建ててくれと言ってきておくれ。」妻は夫が見たものを信じておらず食べ物も誰からもらったのだろうと思っていたのです。すると夫は海に戻りました。彼は「魚さんよ。私の友達、魚さんよ。」と呼びました。魚は水の中を急いでやってきてそこまで来ました。彼は言いました。「妻が私と彼女が住めるような立派な家がほしいというんだ。」魚は言いました。「では家に戻ってください。済みました。」戻ると妻が家の中に立っており家の中も（いろんな物で）いっぱいでした。「あっという間にここに家が立ったんだよ。私は中にいて。でも、まだ足りない。戻っておくれ。魚に行っておくれ、ここで私たちが使えるお金が欲しいって。」哀れなことに夫はまた海へ戻って行きました。何も食わず、何もせずまた海へ戻って行きました。再び魚を呼びました。「お〜い、魚よ。友よ、魚よ。」魚がやってきて言いました。「なんですか。」「お金が欲しいんだ。家は住むだけのものだ。何を食べろというのだ。お金が欲しいんだ。」すると魚は彼に言いました。「じゃあ家に行ってみるといい。全てのものが用意されている。」彼が戻ると妻は金の入った箱を持っており家の中にはありとあらゆるものがありました。家中全てに物があふれていました。妻は言いました。「夫よ、こんなことをもたらしてくれる魚だったら、星と月を手にいれたいと言ってみよう。」「ええ、妻よ。」妻は言いました。「そうよ。私たちは王にも勝てるわ。私たちは星と月を手にするのよ。王だって私たちには敵わない。」哀れな漁師はまた海に戻りました。この物知りの魚はきっとすごいものの持ち主に違いない。彼に言ってみよう。彼は再び魚を呼びました。魚がそこへやってくると漁師は言いました。「妻が私たちを月と星の王にしてほしいと言っている。」「今回はもうかなえてあげることはいけません。さあ、以前のお前さんたちの小屋に戻って欲張りな妻とくらすがい。金輪際、私とあなたはお別れだし、私を呼びにもくるのではない。」妻のところへ戻ってみると昔の古びた小屋があるだけで何もありませんでした。彼は妻に言いました。「妻よみたかい。あなたの欲は大きすぎて私たちは全てを失ってしまったのだよ。」